婚約破棄を言い渡した王子は悪役令嬢の兄に執着される1

Character

登場人物紹介



目次

婚約破棄を言い渡した王子は悪役令嬢の兄に執着される1　7
番外編　エルダーの独り言　299

婚約破棄を言い渡した王子は悪役令嬢の兄に執着される1

第一章　蘇る前世の記憶と遅すぎた後悔

「――以上の罪により、お前との婚約を破棄する！」

その瞬間、目の前が大きく歪んだ気がした。

ヴェルサイユ宮殿かと見紛うほどの豪奢な景色がぶれて世界の輪郭が曖昧になる。方向感覚を見失うような気持ち悪さが襲ったが、それは一瞬のことだった。

「そのお言葉、間違いだったでは済まされませんわよ。フィリアス様」

バイオリンのような凛とした声に意識が覚醒する。

否、自分はずっと目覚めていたはずだ。それなのに今、長い眠りから覚めたような気さえする。

自分はフィリアスだ。フィリアス・ランバート。この国の第二王子であり、王位継承権を持つ高貴な存在だ。

いやなんだ、高貴な存在って。ふと湧きあがった軽い思考に混乱する。

「間違いではありませんわ！　ロザリア様はわたくしをいじめていましたもの。フィリアス様もそんな方とは結婚できないって！　だからロザリア様との婚約を破棄されて、わたくしと結ばれるんですわ」

高飛車な女の声がした。それも自分のすぐ側から。

何事だと意識を向けた先にいた女の顔と、そして周囲を取り巻く人たちを見て俺は数度瞬きした。

絢爛豪華な衣装はまるで映画のセットのようだ。その思考に被せるようにドレスを着ている人物の名前が頭の中で弾き出される。その名前を俺は知っている。でも知らない気もする。

そんな感覚のまま、自分のものとは思えないほど整った指先が指し示した女性を見る。

意志の強い金色の瞳に見据えられた瞬間、濁流のように流れ込んでくるフィリアスと前世である畑中陽一の記憶に、今度は間違いなく目眩がした。記憶が混ざり合って混乱する。それでもすぐに自然と「これはどちらも自分の記憶だ」と受け入れた。

……ここは王城だ。そして今は建国記念晩餐会の最中で、俺は第二王子としてここに出席している。

そこまで状況が整理できたからこそ、自分が置かれた状況に焦りが生まれた。

「……あなたとフィリアス様が？」

「ええ、わたくしたちは真実の愛で結ばれました。ですからもう、ロザリア様はお役御免ですわ」

社交界の薔薇と謳われたロザリアが俺の隣にいる女を一瞥し、扇を口元に当ててお手本のように微笑んだ。

俺はその微笑みに、一気に血の気が引いた。

「お似合いね。……お二人とも、本当によく似ていらっしゃいますもの」

見限られた。瞬時にそう悟った。

ロザリアの華やかだがどこまでも冷たい声に思わず声が漏れる。
「……終わった」
「負け惜しみですの？　それよりも、わたくしにしたいじめの数々を謝罪なさってくださいな！」
終わった。本当に終わった。
前世の記憶を思い出し、そして冷静な思考能力を得た俺は、事の大きさをこの瞬間自覚した。
俺が今した行動は、国家反逆罪と言われてもおかしくないものだ。
「……」
王族と貴族の婚約は政治と同じだ。それを俺は一方的に破棄したのだ。
王子という立場でありながら俺は普通の子供のような感情に振り回されて自由恋愛なんて馬鹿なことをし、こともあろうか公爵家との婚約を自らの意思で反故にした。
すなわち、今この瞬間王子である俺が、この国を危機に陥れたのだ。
意気揚々とロザリアに対して突き出した指が今は情けなく震えている。膝も震えてきたし、きっと顔色も青白くなっているだろう。
「フォークナー公爵家の名において申し上げます。わたくしがそのような仕打ちをした事実はございません。ですが、この場に身を置く理由ももはやございませんわ。――ごきげんよう」
かつての婚約者には一瞥もくれず、凛とした声で言い放ったロザリアが、完璧な所作で礼を取る。
颯爽と踵を返す姿を呆然と見ていると、視界にある男の姿が入った。
「ひっ」

艶やかな短い黒髪を後ろに撫でつけ、冷たい印象を持たせる金の瞳を持つ美丈夫が、視線だけで俺の心臓を突き刺した。
完成された美貌が俺を捕らえ、そして整った薄い唇がわずかに動いた。
――覚えておけよ。
殺気すら漂わせる視線で俺を見ていた男、ロザリアの兄であるリュシアン・フォークナーは間違いなく俺にそう言っていた。リュシアンは氷のような微笑を俺に向けていた。その目はどこまでも冷たく、そしてゴミでも見ているようなそれだった。
終わった。
今度こそ、手の施しようがないくらいに。
俺はもう一度そう思った。
ロザリアをエスコートして去っていく背中を見ながら、力なく手を下ろす。
どうしてもっと早くに記憶が戻らなかったのだろう。もっと早く、せめてあと数分早く記憶が戻っていたら、こんな回避のしようがない死亡フラグを叩き折れたかもしれないのに。
だが、そう思ったところであとの祭りだ。
前世を思い出したところで俺の能力は上がらない。だって、俺は普通の人間だ。
「フィリアス様、陛下がお呼びです」
将来は俺の右腕として活躍するはずだった男が、俺と同じように顔面を蒼白にして耳打ちしてくる。

いつの間にか止まっていた音楽が再開し、王である父の号令でひとまず会場の空気は元に戻ったように思えた。

「フィリアス様、随分と派手なことをされましたわね」

「見ろ。第二王子派が皆、子鹿のように震えているぞ」

「まあお可哀想。それにしても、本当にお顔だけの方でしたわね」

「父君譲りの金糸の髪とサファイアを溶かした瞳も、宝の持ち腐れね」

「本当に。あれでは王族の恥と言われても仕方がないわ」

「美しさだけではどうにもならぬな」

ギリギリ届く声量の貴族たちの声を背中に、俺は父の待つ別室へと急いだ。

俺の腕を我が物顔で掴んでいた男爵令嬢は近衛兵に引き離され、彼女の喚き声も聞こえる。

ああ、クソ。本当にどうしてこんなタイミングなんだよ。

どうしようもないことを何度も頭の中で繰り返しながら歩き、あっという間に別室の前に着いた。

死刑台に登るような気持ちで中に入ると、父と母の姿がそこにあった。

「……フィリアス、自分が何をしたか、わかっているのか」

「どうして……どうしてこんな愚かなことを」

俺を溺愛していた王妃である母が泣いている。そして少なからず俺を周囲にもわかる形で愛してくれていたはずの父は、その目に失望を色濃く乗せて俺を見据えた。

仕方がないとわかっていても、何度だって思う。

どうして思い出すのがこのタイミングだったんだ。

父の目にはもう俺への、フィリアスへの愛情は見えなかった。ただ為政者としての厳しい目が俺に向けられ、俺はただ頭を下げることしかできない。

「申し訳、ありません」

「……謝っても時間は戻らぬ。間違いでは済まされないことをしたのだ、フィリアスよ」

母は何も言わずに泣いている。

その姿は今から俺に下される判決を知っているようだった。

「王命により、貴様の王位継承権を剥奪する。これは王家の名誉と、国家の安寧を守るための措置である。――わかってくれるな」

当然の報いだ。むしろ優しい措置だと思えるほどこの状況を理解しているのに、奈落の底に落ちていくような絶望感が一気に押し寄せてくる。

十九年積み上げてきた自分の全てが、塵となって消えていく。

わあ、と泣き崩れる母の声が聞こえる。

心から申し訳ないと思うのに、俺は頭を下げたまま、何も言えなかった。

「至急フォークナー公爵との面談の場を設ける。王家としての正式な謝罪を行い、此度の件をどう収めるか話し合うことになるだろう。……最悪、継承権剥奪以上の結果になるかもしれないが、お前は余計なことはするな」

「……はい」

父が母を連れ立って部屋から出る。
ぱたりと閉まる扉の音が鼓膜に届いて、膝から力が抜けた。
「……ごめん、父様、母様」
情けないくらい震えた声に応えてくれる人は、どこにもいなかった。

建国記念晩餐会から数日後、フィリアス・ランバート廃嫡の報せが国中に知れ渡ることとなった。
王の名の下に宣言された文言はこうだ。

一、王太子フィリアスの王位継承権を永久に剥奪する。
二、王族籍より除名し、ランバートの姓を名乗ることを禁ずる。
三、王都よりの退去を命じ、フォークナー公爵家の監視下に置く。

王族というのは厄介なもので、廃嫡されたからといって平民になるわけではない。国内の機密情報を有している上に、流れている血は間違いなく王族のものだ。
そんな人間をそこら辺に投げ捨てるわけにもいかず、かといって処刑の命が下っていないのに命を奪うわけにもいかない。
だからこそ、今回最も名誉を傷付けられた公爵家が監視役を与えられるのは、自然な裁定だった。
被害者である公爵家が、本来ならば極刑でもおかしくない俺を監視という名の延命措置に同意したことで、王家に恩を売ることができる。
けれどその実、俺を生き長らえさせたことで公爵家の権力はより強いものとなった。この件で両家の関係は従来とは違い、より対等に近いものになったに違いない。
俺の愚行が一夜にして国の勢力図を変えたのだ。
自分が犯した責任の重さに腹の奥がずん、と鉛を呑んだように重たくなる。
けれど廃嫡された王子にできることなんてありはしない。
何度目かわからない溜息を吐いて、暗い馬車の中で項垂れた。
俺は今、公爵領に向かっている。
俺が今から向かうのは公爵家が治めるシモンセキ領だ。
王都から離れてはいるが軍港として栄えている場所で、国の軍事拠点の一つでもある。
「……俺と三つしか違わないのに、大したやつだな」
そこを治めるのは現公爵ではなく、嫡男のリュシアンだ。晩餐会で俺を視線だけで殺そうとした男である。
リュシアン・フォークナー。俺の元婚約者の兄であり、将来は公爵となって国を支える存在になる人物。社交界の薔薇と呼ばれる女性の兄というだけあり、彼も大層な美貌の持ち主だ。
リュシアンは俺よりも頭一つ分と少しは背が高い。それに士官学校を首席で卒業し、その後軍属も経験したおかげか体格も悔しいくらいに恵まれている。
今この国で最も婚姻の競争率が高い貴族は誰だと聞かれたら、誰もがリュシアンだと答えるだろ

う。彼はそれくらい見た目にも能力にも優れていた。
それなのに何か事情でもあるのか、それとも公爵家の求める条件が厳しいのか。婚約の一つもしていない変わり者でもある。
そんな人物のところに今から預けられるのだ。
「俺は監視対象として送られているんだな」
ガタガタと揺れる馬車の中、俺の声に返す人物は存在しない。
勅令が出たその日のうちに、俺は王都から出た。
近衛兵が数人と、引き渡しの儀に必要な役職を数人だけ連れた小隊だ。
俺が乗る馬車の前後に騎馬兵が付き、カーテンが閉め切られた箱の中には俺しかいない。
もう王都を出て数日経った。ようやく折り返しだろうか。
「それにしても、馬鹿なことをした」
正直、この待遇に今は感謝している。
前世である畑中陽一の記憶が戻ってからの日々が目紛るしくて、頭の整理ができていなかったのだ。
「少し冷静になれば、いくらでも踏みとどまれるタイミングはあったのに」
俺の前世、畑中陽一はどうやら俺よりも十歳は年上だったようだ。
まったく知らない世界で生きていたようだが、この記憶と意識のおかげで以前の自分よりも随分冷静に物事を考えることができていた。

俺は、フィリアスは、王族とは名ばかりの普通の人間だった。
王族の証でもあり、同時に武に秀でた父と同じ金色の髪に青い目。
そして賢妃と呼ばれ、傾国の美姫と評された母に似たこの顔は、俺にとってプレッシャーにしかならなかったのだ。
『この程度の剣技、父君は十の頃には我が物にしておりましたぞ』
『……この設問は以前解き方をお教えしたではありませんか。王妃様に似ているのはお顔だけのようですね』
これに似たようなことを数え切れないほど言われた。
はじめは俺も躍起になって認められようと努力したが、それが越えられない壁なのだと気付いた瞬間があった。
「ロザリア・フォークナーと申します」
婚約者候補として連れてこられたロザリアだ。
彼女は才媛だった。頭脳も剣技もそれ以外も、彼女は全てにおいて俺よりも遥か上に立っていた。
同い年の女の子に手も足も出なかった俺は、その日絶望したのだ。
それでも食らいつこうとした時期もあった。
けれど俺には大した才覚もなくて、そしてそれを認めるだけの度量もなかった。
結果どうなったかといえば、権力を振りかざすわがままで傲慢な放蕩王子に成り果てたというわけだ。

「……救いようがない」
本当に、どうしようもないほどに。
拗ねるのが一年やそこらならまだいい。けれど俺は畑中陽一の記憶を思い出すまで、そのコンプレックスを拗れに拗れさせたのだ。
「だからあんな女に……」
そんな恨み言を吐いて、頭を振る。
全ては自分の弱さが招いた結果で、彼女もまた自分のわがままの被害者なのだ。
誰からも認められないと不貞腐れる俺の弱さを彼女は見抜いていた。そして俺は彼女から与えられる耳触りのいい言葉に簡単に傾倒した。
いつしか自分の考えることが正しくて、周りが間違っているのだと思うようになった。そうして助長した結果がこれだ。
王族を侮辱した罪で男爵令嬢は修道院送りとなり、男爵家は爵位剥奪の上、国外追放となった。犯した罪を考えれば、俺も男爵家も命があるだけ運がいいのだろう。
これから待っている暮らしは生きながら死んでいるようなそれだ。以前の俺なら癇癪を起こして暴れ回っていただろうが、今は随分と落ち着いていた。
これも前世の記憶のおかげだろう。
「……元々その器じゃなかったんだ。これからは静かに暮らそう」
こう思えば、あのタイミングで記憶が戻ってきたのも意味があるように思えた。

あの場を回避できたとしても、俺にはとても王は務まらないし、あの男爵令嬢を御せる器でもない。つくづく分不相応だったと思いながら、これからの生活に思いを馳せた。
きっと今までとは比べ物にならないくらい質素な生活になるだろう。
元王族とはいっても俺は罪人に等しいから、関わり合いになる人間もきっといない。
だが仕方がない。それほど俺のしたことは悪だったのだから。
……公爵領に着くまであと数日はある。その間、もう少し畑中陽一の記憶に浸ってみよう。この記憶は今まで読んだどの本よりも面白い。
暇を潰せるものがあってよかったと、俺は目を閉じて馬車の揺れに身を任せた。

頬を撫でる風に潮の香りが混ざる。
それだけでここが王都から遥か離れた場所だというのがわかった。
憎たらしいほど清々しく晴れた日、公爵領に到着した俺は引き渡しの儀礼に参列していた。
「王家の名の下に、廃嫡せられしフィリアス・ランバートをフォークナー公爵家の監視下に置く」
リュシアンと使者のやり取りを聞きながら、ふと自分が着ている服を見る。
王子だった頃は絢爛豪華な服を着ていた。シャツ一つにすら金の刺繍が入っていたし、色も俺が気に入ったものばかりだった。
けれど今は質素な服だ。シンプルな白いシャツに地味な外套、それにパンツ。靴も簡素だ。けれど不思議と着心地がいいのは、全ての仕立てがいいからだろう。

「この命、確かにお預かりいたします」
その言葉に逸れていた意識を戻す。
厳かに行われた儀礼はつつがなく終えたようで、俺の護衛という任務から解放された面々の背中は、どこか晴れ晴れとした様子に見えた。
それにわずかばかりの寂しさを覚えたが、気にしている場合ではないなと息を吐く。
「フィリアス殿下」
凍てつく声に呼ばれ、背筋に冷や汗が伝った。
視線を向けると、そこには俺のことを見ようともしないリュシアンがいた。
「リュシアン」
「殿下におかれましては」
呼ばれるはずのない敬称に鳩尾辺りが引き絞られるように痛む。リュシアンがこんな間違いを犯すはずはないと理解しているからこそ、口が重たい。
「あ、あの、俺はもう王子じゃ」
冷たい金の目が俺を見た。
明らかな敵意と嫌悪が宿ったその視線に俺が怯えても、リュシアンは表情をぴくりとも変えないまま口を開いた。
「存じております。ですが私は殿下の名すら口にしたくありませんので」
これ以上ないほど、はっきりとした拒絶に心臓が痛んだ。

わかってはいたが、こんなにも明確に「お前が嫌いだ」と言葉でも態度でも示されるのはなかなか辛いものがある。
「……わかった。これから世話になる」
けれど俺はこれに文句を言える立場ではないし、こんな態度を取られても仕方のないことをしたんだ。
視線を下げていると、リュシアンが探るような目で俺を見ているのがわかった。
これまでの俺なら間違いなく癇癪を起こして、この場で暴れ回っていたからだろう。かつての己を省みる度に情けなさで穴に入りたくなる。
「どのような心境の変化かは存じませんが、本日この時より我がフォークナー家が貴殿の命を預からせていただきました。……部屋に案内します。どうぞこちらへ」
リュシアンが踵を返し歩き出す。
その速度や発言に驚きつつ、後に続きながら俺は口を開いた。
「別にお前が案内しなくたって」
「お前？」
歩調を緩めることも、俺のほうを見ることもなく、けれどはっきりとした嫌悪を滲ませた声が発せられ、唇を噛む。
「……悪い。じゃあ、どう呼んだらいい？」
「ご自身の状況を鑑みた上で、お好きなように」

答えになってないじゃないか、そう言いたかったが口答えできるはずもなく、また歩き出したリュシアンの後を追う。

「私が殿下をご案内するのは使用人に当たり散らされては困るからです。殿下は少々こだわりが強い御方だと、ロザリアから聞いておりますので」

薔薇の棘に刺されるような言葉の羅列に早くも挫けそうだ。

これは遠回しにこの屋敷の誰もが俺を歓迎していないことを指している。しかもロザリア（元婚約者）の名前まで出して、俺を牽制している。

当然だ、当然のことなのだが、これを辛いと思う感情までは制御しきれない。

それでも自分の中に残ったなけなしの矜持が泣くなと俺を叱責する。鼻から呼吸して歯を食い縛り、なんとか堪えながらただ無心でリュシアンの背中を追いかけた。

やがて見えたのはさすが公爵家と言わんばかりの広々とした庭園と、その離れにひっそりと佇む館だった。

「こちらが今日から殿下にお住まいいただく場所です。最低限の使用人はおりますが、くれぐれも無体はなさらぬようお願いいたします」

「しない。そんなこと」

「口ではどうとでも」

王子として生きてきた俺は、こんなに冷たく接せられたことがない。

けれど俺はこういう態度を父と母以外の全ての人たちに取っていたと思う。随分最低な人間だったのだなとようやく理解できて、思わず自嘲した。

「殿下には基本的にこの屋敷の敷地内で暮らしていただきます。何かありましたら使用人にお伝えください。ですがここは王城ではありません。以前のようなわがままが通るとは思わないように」

何重にも釘が刺されて情けなさで眉が下がる。

「……わかった」

頷いた俺を見たリュシアンが去ろうとしたのを見て、俺は咄嗟に口を開いた。謝らなくてはと思ったのだ。

「あの」

「まだ何か」

壁のような威圧感に緊張から喉が渇く。

けれど一度声を出したからには引き返せないと、覚悟を決めて口を動かした。

「ロザリアにあんな屈辱的な真似をして、本当にすまなかった」

リュシアンは何も言わず、ただ晩餐会の時と同じような目で俺を睨んだ。

その程度で許されると思うなよ、そう言われているみたいだった。

「……仕事がありますので。失礼する」

ただそれだけ残して、リュシアンは今度こそ立ち去った。

残された俺はしばらく呆然とその場に立ち尽くしていたが、これも仕方がないことだと深呼吸をして空を見た。

やはり憎らしいくらい晴れている。空からも嘲笑われているようだ。
けれど今日から新しい人生なのだと思えば、悪くない空模様な気もしてきた。
改めて自分に充てがわれた屋敷を振り返って「立派じゃないか」そう呟いた。
今までの俺なら「なんだこの家畜小屋は！」くらいは言っていただろう。それくらい王族として生きてきた俺にとっては質素な屋敷だが、そのギャップも畑中陽一の記憶とその価値観が補填してくれる。
罪人なのにこんなにも立派な場所で暮らせる。
そう思える自分に驚くと同時に、やはり悔しくもあった。
「……もっと早くにこの視点を持てていたら、俺も変われたんだろうな」
こんなことを言っても仕方がないと一人笑って、取っ手に触れる。繊細な彫刻が施されているそれを握り、力を入れて扉を開いた。
そこに広がっていたのは俺が一人で住むには十分すぎるほどの広さと、そして清潔感のある空間だった。
余計な調度品は一切なく、木の暖かみが伝わる造りの洋館だ。
過ごしやすそうだ、それが第一印象だった。
「お待ちしておりました」
出迎えてくれたのは口周りに髭を蓄えた、品のいい初老の紳士だった。
若干目つきが険しい気がしないでもないが、俺のしたことを思えばそれも仕方がない。

「フィリアスといいます。今日からお世話になります」
軽く頭を下げると驚く気配が伝わった。なんの反応もないことに不安を覚えつつ体勢を戻すとその通りの顔をした紳士がいて、彼はそんな空気を払拭するように小さく咳払いをした。
「私なぞにそのような言葉遣いも態度も不要にございます。さて、私は本日よりフィリアス様の身の回りの世話を任されました。エルダーと申します」
「エルダーさん」
「エルダーです」
「……エルダー」
意志の強い目に見据えられて根負けした。控えめに名前を呼ぶと、彼は満足そうに頷く。
「はい。それでは寝室からご案内いたします。お疲れでしょうからその後は入浴など」
「そんな客人みたいな扱いはしなくてもいい」
「何をおっしゃいますか」
寝室へと続く階段を上っていたエルダーが足を止めてこちらを振り返る。
厳しい視線に思わず背筋を伸ばすと、髭がわずかに動いた。
「どのような方であってもフォークナー家がお預かりするのであれば、その方には相応のおもてなしをせねばなりません。それが我らの仕事です」
軽く殴られたような衝撃だった。
エルダーは知っているはずだ。俺がどんな経緯でここにいて、誰に何をしたのかも。それなのに

仕事だと割り切っている姿に、喉の奥が締まるような感覚がした。
「わかった。案内を頼む」
「はい」
絞り出すように呟くとエルダーが頷き、案内が再開した。
俺に与えられた館には寝室のほかにも書斎や浴場、食堂など生活をするには一切困らない設備が整っていた。
それに安堵したが、すぐにどうしようもない後悔が襲ってくる。今までの自分では得られなかったこの感覚は、前世の記憶からくるものだろう。
罪人として監視されるのに、何もしなくてもこの環境で生きていける事実が辛い。
どうやら畑中陽一の生きてきた世界には、【働かざる者食うべからず】という信条があったようだ。確かにその価値観に照らし合わせると、俺のこの状況はあまりにも恵まれすぎている。
これを当然だと思ってはいけないのだと、俺は漠然と思った。
「エルダー」
「なんでしょう」
その衝動のまま俺はエルダーを呼び止めた。
「ここで俺にできる仕事はないだろうか」
その言葉にエルダーは目を見開き、豊かな口髭の隙間からぽかっと開いた口が見えた。

翌日の朝、俺はリュシアンの絶対零度の視線に晒されていた。
「ご自身の立場を理解されていないのですか？」
「している、つもりだ」
「ならばどうして仕事などという考えが浮かぶのか、一度殿下の頭を覗いてみたいものです」
遠回しに『余計なことを考えるな、馬鹿が』と言われた。
昨日俺がエルダーに提案したことは見事にリュシアンに伝わったらしく、今俺は充てがわれた部屋のソファに縮こまるように座っている。
歩数にして一歩半ほど離れた場所にいるリュシアンは、その整った顔に呆れと怒りを混ぜた表情で俺を見据えていた。
「何もなさらずともいいのです、殿下」
いっそ優しいとも思える声音に思わず顔を上げたが、喉からは「ひっ」と情けない悲鳴が漏れた。
「何もせず、何も考えず、ここで生きてくれさえすればいいのです」
光を宿していない人の目がここまで恐ろしいというのを、俺ははじめて知った。
何も言わない俺を見て、リュシアンは目を細めた。その鋭さから目を逸らせずにいると、控えめなノックの音が響き、張り詰めていた空気が和らぐ。
「リュシアン様、そろそろ」
「わかった。……それでは殿下、くれぐれも余計なことを考えぬよう」
上等な刺繍が縫い付けられた黒のジャケットを翻し、リュシアンが部屋から出ていった。

緊張感から解放されて息を吐き、そのままソファに背中を預ける。
美形の怒っている顔は怖い、つくづくそう思った。
フォークナー家は社交界の中でもとりわけ容姿が華やかなことでも有名だ。現公爵とその奥方をはじめ、リュシアンやその妹のロザリア、まだ十歳も迎えていない末弟ですら噂になるほどだ。
その中でも特に目力のあるリュシアンに睨まれてしまっては、俺はひとたまりもない。
昔からそうだ。
王家と公爵家は幼い頃から付き合いがある。だから大人になる前のリュシアンも知っているが、俺は子供の頃から彼が苦手だったのだ。
「……昔から怖いんだ、あの目は」
猛禽類と同じ鋭い目。あの目で何かにつけて俺を睨むのだ、あいつは。
確かにそうされても仕方がないほど王族として出来は悪かったが、それでもあの頃の俺はまだ拗れていない。それなのに睨まれていたのだ。
「そんなに前から嫌われていたのか」
「そういうわけでもないかと」
「うわっ」
「だらしがないですぞ、フィリアス様」
気配なく部屋に入ってきていた声に肩を跳ねさせた。それからきちんと座り直して声のほうに顔を向けると、昨日とまったく同じ服装をしたエルダーがいた。

「そういうわけでもないって？」
思わず問いかけると、エルダーは何かに思いを馳せるように目を細めた。
「あの方は昔から人をよく見ておいでです。幼い頃はより顕著でございました。まあ、習慣のようなものでしょうな。……今はなんとも言えませんが」
向けられた視線の中に含まれる呆れの色に居心地が悪くなる。けれどこれも身から出た錆というもので、俺に反論する資格はない。
「さてフィリアス様、本日は庭園などご案内しましょう」
「……ああ、ありがとう」
ソファから立ち上がりエルダーの後についていく。
庭園といえば王城のものも随分見事だったと思い出す。けれど俺はそれに関心を示すことがなかった。
否、幼い頃は関心があった。庭師とも会話をしていたように思う。
けれどそれも年を追うごとになくなった。自分の周囲全てが敵に見えたからだ。
「本邸は灯台の役割も兼ねております。船の導き手ですな」
整えられた道を歩きつつ、エルダーが送る視線の先に意識を向ける。
離れた場所から見る本邸の堅牢な佇まいに、思わず感嘆の息を漏らした。
軍港として機能しているこの街の公爵邸は木製ではなく、ほとんど石材で造られている。守りの要として当然だが、まるで要塞だ。

要塞と聞くと堅苦しく感じるが、俺は嫌いではなかった。そして高い場所に建築されているこの場所からは海が見える。

朝日を受けてきらきらと輝く水面は眩しいほどに美しく、思わず目を細める。こんな景色を見るのははじめてだった。

「綺麗だな」

「はい。豊かな領地だと思います」

エルダーが頷き、次は整えられた庭園のほうへと進む。朝の散歩としては十分すぎる広さがある中を歩きつつ、時折エルダーが庭に植えてある希少価値の高い植物や、季節によっては虫が出るとされる場所を教えてくれた。

以前は植物の話なんてまったく興味がなかったのに、今は不思議と素直に聞くことができる。そうして歩いていると、やがて大きな建造物の前に辿り着いた。

「そしてここが温室です」

「……すごい」

塩害から守るためか王室のものよりも立派に見える温室に目を丸くする。遠くから見ればガラスでできた城だ。

見た目からわかる美しさに感動を覚えながら足を進める。

一つ一つに丁寧に説明をしてくれるエルダーの話を聞きながら足を進めると、少しだけ空気が変わった気がして目を瞬かせた。

「ここからは当家の菜園となります。市井の作物も素晴らしいですが、こちらのものもなかなかですぞ」

「食卓に並ぶ野菜もここから？」

「はい。フルーツなどはマーケットで調達しております」

「おお？　なんだエルダー様か。おはようございます」

どこからともなく聞こえてきた深い声に肩を跳ねさせる。声の発信源を探るべく視線を巡らせると、頬に土を付けた壮年の男性を見つけた。

「ゴードン、おはよう。朝からご苦労ですな」

「野菜の世話は趣味みたいなもんですよ。……んん？　そっちのは」

ほどよく日に焼けた肌に丸い鼻が特徴的な細い男性が俺の顔を見て首を傾げる。視線が頭と目を往復したところで何かを思い出したのか、ぽんと手を叩いてエルダーのほうを見た。

「もしかしてこれが！」

指差されながら言われた言葉に驚いていると、ゴードンの頭に白い拳がめり込んだ。

「やめなさい、ゴードン。フォークナー家でお預かりすることになったお方に、なんて失礼な物言いをするんですか」

頭を片手で押さえながら痛みに悶える人物が再び俺を見て、そして何度か頷く。

「あー、これが例のねえ。……でもだからって殴ることねぇでしょう！」

「ゴードン」

声の低くなったエルダーに慌てて俺は「大丈夫だ」と声をかける。
ゴードンは俺を上から下までくまなく見たが、その目にはこれまでの人たちのような剣呑な色はなく、どちらかといえば好奇心が覗いていた。
それを不思議に思いつつ軽く頭を下げる。
「フィリアスといいます」
「俺ぁゴードンだ。ここのシェフと菜園の管理を任されてる。どうだ、うちの野菜は美味かっただろう」
「ゴードン……」
困り果てたようなエルダーに再度大丈夫だと言って首を振る。むしろ今の俺にはこれくらい気楽に接してくれる人のほうがずっと気分が楽だった。
「とても美味しかった。今は何を？」
「日課の水やりだな。そうだ、あんたどうせ暇だろ。ちょっとこっち来て草引け」
俺に軽くそう言って彼は菜園の道を進んだ。
「ゴードン！」
「わかった」
「フィリアス様!?」
腕捲りをした俺を見てエルダーの目が飛び出さんばかりに見開かれた。そのまま進もうとする俺の前に両手を広げて立ち塞がり、ぶんぶんと首を横に振る。

「なりません！　なりませんぞ、フィリアス様！　リュシアン様に言われたことをお忘れですか!?」
「う……」
朝の絶対零度の眼差しを思い出して気分が重たくなる。
何もするなとリュシアンは言っていた。監視対象としてそれが正しいとも理解しているが、素直に頷きたくない自分がいる。
すると前方から軽い声が飛んできた。
「別にいいじゃないですか、エルダー様」
「あなたは黙っていなさい！」
エルダーの鋭い声に怯まず、ゴードンは飄々とした様子で続ける。
「なんにもしねぇで生きてると人間腐っちまうよ」
その言葉にエルダーは黙り、やがてその言葉に思うところがあったのかやれやれと肩を竦めた。
「今日は駄目です。ですが、このことはリュシアン様にご相談してみましょう」
「そうこなくっちゃなぁ」
予想していなかったエルダーの返答に思わず口を開く。
「いいのか？」
どこか疲れた様子のエルダーが溜息を吐き、ゴードンを指差した。
「あれは言い出したら聞きませんので」

「おいおい、人を厄介者みたいに」
「似たようなものでしょう。まったく、あなたに料理の腕さえなければ……！」
「そうなると困るのはリュシアン様だな」
「くっ！」
気軽な二人の言い合いを見ていて、少しだけ重たかった気分が軽くなる。こういう人間関係を間近で見るのも一体どれくらいぶりだろうか。
「二人は仲が良いんだな」
そう言うと正反対の反応が返ってきた。
「どこが！」
「親友だからなぁ」
「誰が！」
腹を抱えて豪快に笑うゴードンと目を吊り上げて怒るエルダーに思わず表情が緩む。
その日はゴードンから菜園について少し話を聞いて、それから館に戻ることになった。
館の中でやることは特になく、もちろん外と連絡が取り合えるわけでもなければ、リュシアンの住む本邸へも行けない。
俺が立ち入りを許可されているのはこの館の中と庭園のみで、そうなると時間を持て余す。
その結果、時間を潰す方法は読書しかなくなるのだが、これも案外悪くなかった。
静かな部屋での読書が楽しいものだと、俺は今になってようやく気が付けた。ゆっくりとページを捲りながら、ふと窓から外を見る。
空は徐々に黄色味を帯びてきて、一日の終わりを漂わせはじめる。
エルダーがリュシアンに尋ねた結果はどうなるかわからないけれど、明日にはもしかしたら菜園での作業の許可が下りるかもしれない。
そう思うと、明日を迎えるのが少しだけ楽しみになった。

そして翌日の朝、昨日と同じように館へとやってきたリュシアンの顔は、それはそれは不機嫌そのものだった。
「……菜園の業務を許可します」
少し期待はしていたが、まさか本当に許可が出るとは思っておらず目を丸くすると、リュシアンが苦々しく呟いた。
「ゴードンの指示を聞き、必ず厳守してください。くれぐれも余計なことはしないように」
昨日と同じことを言われ、俺はただ頷いた。
眉間に深く刻まれた皺と、うっすらとだが確認することができる目の下の隈に彼の心労を察して申し訳なくなる。
「リュシ、……フォークナー」
「まだ何か」
部屋から出て行こうとするリュシアンを呼び止めると、射殺さんばかりの視線が俺を貫く。

怯みそうになるが、ぐっと奥歯を噛み締めてソファから立ち上がり、彼の顔を見返した。
「ありがとう」
「……は」
刻まれていた皺がなくなり、代わりにぽかんとした、リュシアンにしては珍しい気の抜けた顔が見られた。
「俺のわがままを聞いてくれて。余計な心労をかけただろうから」
リュシアンは何も言わなかった。溜息を吐き、目頭を指で押さえてからまた俺を見る。気の抜けた表情は消え去り、金の目には得体の知れないものを見るような警戒の色が滲んでいた。
「そのように振る舞えば、ご自身の処遇が改善するとでもお思いですか」
思ってもみなかった言葉に驚愕していると、ドア付近にいたリュシアンが一歩二歩と大股で俺との距離を詰める。
重たいブーツの音と圧迫感のある大男が迫ってくるのに反射的に後ろに下がろうとするが、ソファに足を取られてそのまま無様に倒れた。
体勢を立て直すよりも先に大きな手がソファの背もたれを掴み、ふわりと自分のものとは違う匂いを感じる。
甘く、どこかぞくりとする香りがする中で、俺は近い距離で金色の視線に貫かれていた。
「我がフォークナー家は、殿下が妹にした仕打ちを忘れません。そして私は、それを未来永劫許すつもりはない」

低く、一言一言刺すように告げられた言葉に胸が鋭く痛む。
エルダーやゴードンは俺よりも随分と大人だから、俺が気に食わないなんて態度をおくびにも出さない。
けれどリュシアンは違う。以前ならともかく、今はもう地位も名誉も何もかもが俺よりも遥か上の存在だ。この土地でリュシアンだけが、俺に非難を浴びせられる。
「……泣けば私の態度が柔らかくなるとでも？」
「え」
そう言われてはじめて自分が泣いているのに気が付いた。
慌てて目を擦ると、確かに濡れた感覚がある。自分でもどうして泣いているのかわからないまま、咄嗟に両腕で顔を隠した。
「情けないところを見せてすまない」
「……」
答えは何も返ってこず、代わりにソファから重さがなくなった感覚がした。それまで感じていた香りが遠くなり、足音もドアに近付いているようだった。
「失礼します」
静かに扉が閉まる音がした。それから誰の声もしないから、きっとエルダーも部屋に入ってきていないのだろう。
自分が泣いていると気付くと、不思議と涙が止まらなくなった。

呼吸が少し苦しくなって、喉の奥がぎゅうっと締まる。どうして自分がこんなにも泣いているのかわからない。

悲しいのか、悔しいのか、その両方なのか。自分の乱れる呼吸をどこか他人事のように聞きながら、意外なほど冷静に自分のことを考える。

背もたれを掴んで上体を起こし、大きく息をした。

今日まであったことを思い返しながら手の甲で涙を拭う。

「十九にもなる男が、情けないな」

想像以上の鼻声に思わず笑ってしまうと、少しだけ気分が落ち着いた。

そしてなぜだが心も軽くなった気がする。

そこで思い出したのは畑中陽一の記憶だった。記憶の中で彼は激務に追われた際しょっちゅう泣いていた。やるせなさもあっただろうが、それはストレス解消のためでもあった。

ストレス。その答えに行き着いて俺はまた笑う。

リュシアンの言葉に確かに傷付きはしたが、あれくらいの言葉なら慣れている。それなのに不覚にも泣いてしまったということは、自分の中でいろいろと限界がきていたのだろう。

思えばこんなにも心が軽くなったのははじめてな気がする。

もう誰にも期待されずに済む環境は、これほどまでに余裕をくれるのか。

それに気付いた原因が己の不祥事であるということはやはり心に影を落とすけれど、それでも俺の胸に湧くのは安堵だった。

「エルダー、いるか？」

「お呼びですか、なっ!?」

「ひどい顔ですまない。顔を洗ったらゴードンのところに行こうと思うんだけど、いいか？」

「それは構いませんが」

「ありがとう」

困惑しているエルダーには申し訳ないが、俺は今とても気分がよかった。晴れ晴れとしていると言ってもいい。

顔を洗い、そのままの足で菜園に行くと先に作業をしていたゴードンが振り返った。

「よお、来た、か……」

ゴードンも俺の顔を見て固まり、そして後ろに控えているエルダーを見た。

二人の間でどんなやり取りが行われているかはわからないが、ゴードンが俺を指差した瞬間、ぴしゃりと叱責の声が飛ぶ。

「不敬ですぞ」

「気にしないでくれ」

「どうしたんだよ、時間経つと目とかぱんぱんになるぞ、それ」

「前が見えたら問題ない」

「それもそうか。よし、じゃあ草引きからするぞー。虫程度にびびるなよ」

「わかった」

少し離れた場所でエルダーがそわそわとこちらを見ているのが雰囲気でわかる。元王族で監視対象が草引きしているなんて、確かに俺がエルダーの立場なら冷や汗が止まらないだろう。

内心で謝りつつ、それでも俺はそれを無視してゴードンの隣に膝を折った。

「雑草と食いもんの区別は？」

「ある程度」

「ならよし。ここの草、引いといてくれ。草はこのカゴに入れたらいい」

指示に頷いて土に手を伸ばす。

緑と茶色のコントラストに触れる前に、指先まで整えられた自分の白い手が目に入った。

『見た目だけは王妃様に似ている』

『整っているのはお顔だけのようですわね』

そんな陰口もたくさん言われたなと思い出す。

俺の顔は、傾国と言われるほどの美貌を持つ母に似ている。そしてその顔に似たおかげで、俺はいい思いも嫌な思いも数え切れないほど経験した。

けれどそれももう関係のないことだ。誰に似ていようと俺はすでに王太子ではなく、ただの一人の人間だ。

躊躇（ちゅうちょ）なく土に触れて草を引く。途端に指先が茶色に汚れたが、それがなぜだか心地よかった。

「土はちゃんと払って根っこだけにしてカゴに入れるんだ。ここの土は俺が丹精込めて育ててんだからな」

「土も育てるのか？」

「当たり前だろ。土台ができてなきゃ美味いもんが作れるはずがねぇんだ」

その言葉に目から鱗（うろこ）が落ちるようだった。

「そうか、土台か」

「ああ」

草を引きながらここに来るまでのことを考える。

俺は派手なことが好きだった。剣でも勉強でも、俺は難しいものほどやりたがった。理由は簡単だ。難しいものができたほうが格好いいからだ。

難しいものができれば褒められる、認められる。

俺はそう思って応用ばかりに手を出して、基礎を疎（おろそ）かにした。全ての応用の元には基礎があるというのに。そんなことすら、俺は今の今まで理解しようとしていなかった。

「なんだ、これ、そんな楽しいか？」

無意識に笑っていたようで、ゴードンが不思議そうに問いかけてくる。

それに頷いて、爪の間に土が入るのも気にしないで草を引いた。

「ああ、楽しい。今ようやく生きていると思える」

「はー……、やんごとない方の考えることはわかんねえわ」

「ゴードン」

「今のは別にいいでしょ、エルダー様！」

二人のやり取りを聞きながら一本ずつ草を引いていく。
緑が多かった部分から土が見えてくるその感覚が好きだなと、なんとなくそう思った。

菜園の業務の許可をもらってから数日が経過した。
俺の主な仕事は草を引くことか水をやること、それと収穫の手伝いだ。
常に腰を曲げて行う作業ばかりでいまだに慣れないところもあるが、それでも俺はこの仕事が性に合っている。
「そこまで水やり終わったら休憩だー」
「わかった」
ゴードンの声に頷いて、給水所から一番離れた場所にある作物に水をやる。鮮やかな緑が水を弾いて輝く様子は、どんな宝石よりも美しく見えた。
そうして水やりも終わりゴードンのところに行くと、何やら笑っている。
理由がわからず首を傾げていると、背中に隠していたバスケットを俺に見せてくれた。
「今日は特別にデザート付きだ」
「！」
「はっはぁ！　あんたはわかりやすいからいいなぁ」
豪快に笑うゴードンを見て羞恥から少し顔が熱くなるのがわかった。
俺は甘いものが好きだ。フルーツやクリームが載ったものも好きだし、焼き菓子も好きだ。それ

がバレてしまったことに恥ずかしさはないが、明らかに喜んでしまったのが少々気まずかった。
「手、洗ってこい。今日はエルダー様もいねえからな、羽目外そうぜ」
「場合によるな」
今日エルダーはどうしても外せない用事があるらしく、一時的に側から離れている。それでも午後には戻ってくるようで、菜園での業務の間だけ監視の目が少し緩んでいるのだ。
かといって何をするわけでもなく、今日も植物の世話をしているのだが。
土まみれの手を洗ってからゴードンの元に戻る。
菜園にベンチがあるはずもなく、俺たちは地面に座った。
バスケットの中には焼き菓子が入っていて思わず目が輝く。それにも笑われてしまったが、誘惑に勝てずに一つ食べると優しい甘味に笑みが漏れた。
「美味いか？」
「美味しい」
「まあ、俺が作ってるんだから当然だな！」
いっそ気持ちがいいほど自信に満ちた態度がおかしくて笑う。
二人で焼き菓子を食べつつたまに水を飲んで休憩していると、ふとゴードンが俺を見た。
「どうした？」
「いやなぁ、そういえばあんた、噂とは全然違うんだなって思ってよ」
「ああ」

苦笑した。俺に対する噂なんてほとんどが真実だ。
「あんた本当にお嬢様をコケにしたのか？」
「した。そうすることが正しいし、当然だと思っていた」
一切の躊躇なく答えると、ゴードンが少しばかり驚いた顔をした。
「そりゃまたどうして」
「……俺は王族の中でも出来損ないだ。父のような剛毅さもなければ、母のような聡明さもない。王子としての器ではなかった」
「ほうほう、それで？」
自分から聞いてきたくせにゴードンは興味が薄いのか、相槌がどことなく適当な気がした。
その態度に以前の自分なら苛立っただろうが、今は面白いとすら思っている。
「嫉妬していたんだ。俺よりも何もかもが優れているロザリアに。だから大して調べもせず、疑いもせず、ロザリアの言葉を信じることもなく、一方的に辱めた。……疑われることをしたほうが悪いと、そう思っていたんだろうな」
言葉にすればするほど、自分の浅はかさが嫌になる。
「そんなどうしようもない王子様とは思えねぇけどな、今のあんたを見てると」
「そうだな、俺もそう思う」
また一口水を飲み、洗っても落ちない土汚れが残る手を見た。
王子だった頃は考えられなかった光景だ。

「全て失ってはじめて、ちゃんと人間になれた気がする。気付くのが遅すぎたけどな」
そう言って立ち上がり、服に付いた土を払う。
「ほらゴードン、休憩は終わりだ。仕事をしよう」
「はあ!?　なんだよ、もうちょっと休憩しようぜ」
「ダメだ。働くぞ」
「はー……あの人がいなけりゃ楽かと思ったのにそうでもねえな」
よっこらせと立ち上がったゴードンがバスケットを片付けて戻ってくる。
やれやれといった様子だが仕事はきちんとやるつもりらしい。
「王子様よ」
「フィリアスだ。俺はもう王子じゃない」
「じゃあフィルだな。そっちのが呼びやすい」
「……」
突然の呼び名に目を丸くする。
そんな俺に気付かず、ゴードンはずんずんと収穫に向かっていく。けれど途中で立ち止まり、ついてきていない俺を見て首を傾げた。
「何やってんだ、フィル様。仕事しろっつったのはあんただろうが。手伝えー」
自分よりもずっと年上だとしても、曲がりなりにも王子だった自分に対するシェフの態度とは思えない。

でもその気さくさが今の俺にはありがたかった。
「今、行く」
ゴードンの後をついていくと、今までは手を入れていなかった場所に案内された。葉が枯れている区画でゴードンが立ち止まったから、今からここで作業をするのはわかったけれど、俺はその隣が気になった。
膝より少し下の青々と茂る見慣れない植物に視線を向けていると、ゴードンが口を開いた。
「そいつは薬草だ」
「薬草？」
「ああ、この屋敷にゃ医者が常駐してねえからな。何かあった時のための応急処置用で育ててんだ」
そう言われて膝を突き、植物を観察する。
「……このまま食べるのか？」
そう聞くとゴードンが噴き出すように笑った。
「んなわけねぇだろ。ちゃーんと処理して薬にするんだよ」
「ゴードンがするのか？」
驚いて問いかけるとゴードンは得意げな顔で頷いた。
「まあ、俺にかかれば薬草もちょちょいのちょいよ。あ、真似しようとすんなよ？　薬草の処理ってのは案外大変なんだぜ」

したり顔のまま続けられた言葉に頷く。料理以外にも薬まで作れると知って驚いていると、ゴードンはこの薬草の効能と処理の方法を教えてくれた。
聞いているだけで難しく、正直教えられてもできる気はしない。
野菜も薬草も、ゴードンの知恵があってはじめて人の役に立つのだなと感心していると、ゴードンがはっとして俺を見た。
「おっと、忘れるとこだったぜ。薬草の話はこんくらいにして、野菜の収穫すんぞ！」
そういえばそうだったと頷き、視線を畑に移す。
「やり方は簡単だ。とにかく掘って掘って掘りまくる。そんじゃあ、気合い入れていくぞぉ」
「わかった」
しっかりと腕捲りをし直して、俺たちは畑に足を踏み入れたのだった。

「それで、何をどうしたらここまで泥だらけになれるのですか？」
その日の正午より少し前、早めに用事を終わらせたらしいエルダーが菜園にやってきた途端、俺たちは二人並んで怒られていた。
「それはそのぅ……」
「ゴードン。あなた昼食の準備は？」
「今日は弟子に頼んでるから大丈夫です！」
「よろしい。フィリアス様」

「……」
「理由をお伺いしても？」
エルダーが笑っている。けれど空気でわかる。これは怒っている、それもすごく。
さてどう伝えたものかと思考を巡らせるがまったくいい考えが浮かばず、俺は正直に伝えることにした。
「どちらが多く芋を収穫できるか競っていた」
「なんですって」
「しかも妨害ありだぜ」
「ゴードンに足を引っ張られた時はどうしようかと思った」
「そりゃ、フィル様と俺の年の差を考えりゃ、そんくらいの悪戯はあってもいいよなぁ」
エルダーが額を押さえて天を仰いだ。
ぶつぶつと何かを呟いているが、小声すぎて聞き取れない。だがきっと俺たちに対する小言だろう。
やがてエルダーの視線が元に戻り、自然と俺とゴードンは背筋を正した。
「これはリュシアン様にご報告させていただきます」
「なんでだ!?」
俺よりもゴードンの反応が早かった。
「はしゃぎすぎです。お二人は私に言われるよりも、リュシアン様から叱られたほうが効果がある

でしょうからな」
ゴードンが完全に黙った。図星なのだろう。そして、それは俺もだった。
「フィリアス様、館に戻りましたら入浴ですぞ」
「わかった……」
俺とゴードンは完全に項垂れていた。
俺にはこの経験はないが、畑中陽一の記憶にはこれと似たようなシチュエーションがあった。子供の頃、友達とはしゃぎすぎて母親に怒られる、というものだ。
怒られるというのは、すごく精神的に疲弊する。リュシアン相手なら、なおさらだ。
「それにしても」
エルダーが菜園の一画を見て溜息を吐いた。
「どうするのですか、あんなに芋を収穫して」
そこにあったのは三つのカゴに山のように盛られた芋だ。
今年はどうやら豊作だったらしく、ゴードンも収穫中に終わらないと嘆いていたほどだ。
「思った以上に豊作だったんだよなぁ。しかも一つ一つがデカい。スープにするにしてもな」
俺はカゴを見た後に頭を悩ませている二人を見た。
「一つ聞いてもいいか？」
「なんでしょうか？」
「あの広さの城砦なのだから、働いている人たちにも食べてもらえばそう長い間放置しなくてもい

いんじゃないのか？」
　王城とまではさすがに言わないが、それでもこの領の屋敷は広い。要塞と形容したくなるだけあって、一般的に見ればかなりの広さだ。そして、住居の広さはそのまま使用人の多さに直結する。
　それならば山盛りの芋がカゴに三つもあったところで大した問題にはならないはずだと、そう思ったのだが、どうやら俺の見立ては違ったようだ。
　ゴードンは少しばかり気まずそうに頭を掻き、エルダーは言葉を探している様子だった。
　少しの沈黙のあと、エルダーがゆっくりと口を開いた。
「あまり人がいないのです。この屋敷には」
「リュシアン様がな、人をあんまり置きたがらねえんだよ」
「……それは」
　理由を聞こうとしたが、踏みとどまる。
　自分が公爵家の監視対象であることを思い出して、その内情にまで踏み込むべきではないと思ったからだ。
　それを二人も察してくれたのか、にわかに漂った気まずさが消える。
　そしてまた俺たちの視線は山盛りの芋に向けられたのだった。
「こりゃしばらく芋尽くしだな……」
「そうですね。食べられるものがあるだけ感謝しましょう」
「芋もなぁ、飯だけじゃなくデザートみたいにできればいいんだけどなぁ」

立ち読みサンプル
はここまで

　やれやれと肩を竦める二人を見ていたが、その言葉に俺は唐突に思い出した。
　畑中陽一の記憶に度々登場しているものがある。あれは確か材料は芋だけだったはずだと思い出し、咄嗟に声が出た。
「試してみたいことがあるんだ」
　エルダーが首を傾げている。そして多分これから俺の言葉を聞いたら、彼はまた大いに驚くのだろうと容易に想像ができた。
「厨房に行きたいんだが」
「!?」
「あんたが厨房ぅ!?」
　エルダーだけでなくゴードンまで驚いていた。
　だがそんな反応をされても仕方がないのだ。俺は今とてもおかしいことを言っているのだから。
「王子様が厨房になんて来てどうすんだ」
「そうです、フィリアス様。それに厨房は駄目です。刃物があるような場所にあなた様をお連れするわけには参りません」
　ごもっともな言い分に何も言い返せない。
　それならばとゴードンのほうを見た。
「ゴードン。なら、俺の言う通りにやってみてくれないか」
「俺が!?」